『言語存在論』

野間秀樹 著

東京大学出版会

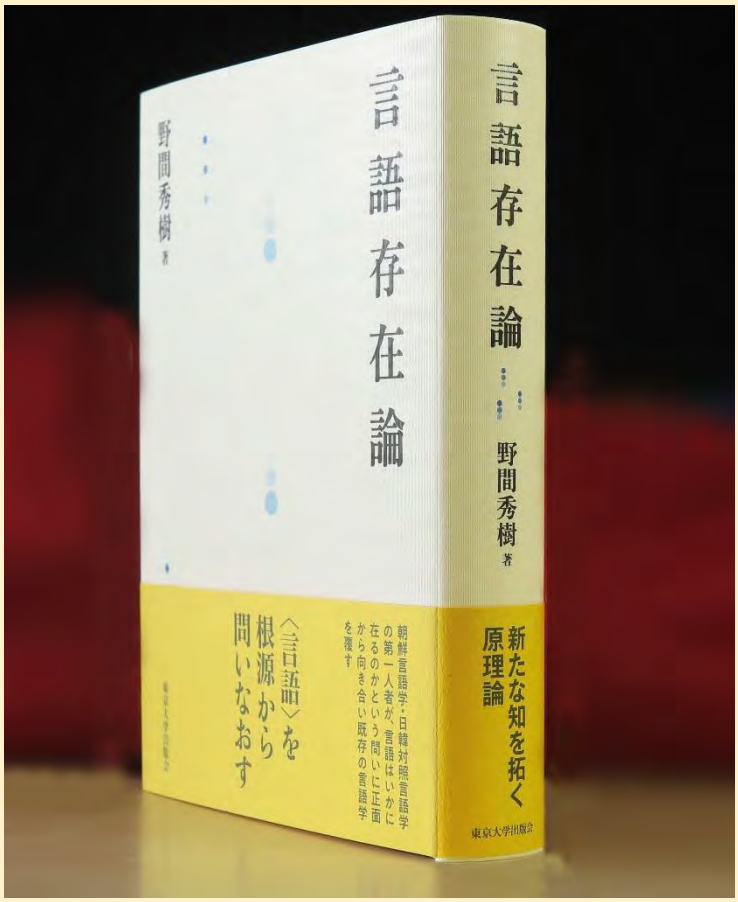
〈言語〉を根源から問い直す原理論

言語はいかに在るのか――これまで問いとして立てられてこなかった視座から，言語を思考する．言語学的な立場を貫きつつも，談話論やテクスト論，文字論などと呼ばれる，既存の言語学とその境界を越え，言語をめぐるさまざまな思考，そして〈知〉のあり方に迫る．

ISBN 978-4130860543　発売日：2018 年 11 月 22 日　A5 判 447 頁　本体 5,500 円　税込 5,940 円

●著者

言語学者．著書に，『ハングルの誕生――音（おん）から文字を創る』（平凡社．アジア・太平洋賞大賞），『韓国語をいかに学ぶか――日本語話者のために』（平凡社），『日本語とハングル』（文藝春秋），『한국어 어휘와 문법의 상관구조』（韓国語 語彙と文法の相関構造．ソウル：太学社．大韓民国学術院優秀学術図書），編著に『韓国・朝鮮の知を読む』（クオン．パピルス賞），『韓国語教育論講座』全 5 巻（くろしお出版）など．大韓民国文化褒章，ハングル学会周時経（チュ・シギョン）学術賞．東京外国語大学大学院教授，ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員，国際教養大学客員教授，明治学院大学客員教授を歴任．リュブリアナ国際版画ビエンナーレ，ブラッドフォード国際版画ビエンナーレ，現代日本美術展佳作賞など，美術家としての活動もある．



はじめに
第 1 章　言語存在論とは何か――言語場へ
第 2 章　言語の存在様式と表現様式
第 3 章　音が意味と〈なる〉とき，
　　光が意味と〈なる〉とき
第 4 章　〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
第 5 章　発話論・文論――言語場から
第 6 章　主述論・省略論――言語化するということ
第 7 章　真偽論・時制論・命名論
　　――言語的対象世界の実践的産出
第 8 章　動態としての言語・動態としての意味
あとがき
参考文献
註
事項索引
人名索引

第 1 章　言語存在論とは何か――言語場へ
1　言語存在論と言語の学
2　言語場論
3　日本語は在るのか？――「何々語」の内実と輪郭
4　言語場と〈文脈〉

第 2 章　言語の存在様式と表現様式
1　音と光――言語の存在様式としての〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
2　言語の存在様式と表現様式
3　〈話されたことば〉から〈書かれたことば〉へ
4　〈書かれたことば〉はいかに生まれるのか――正音エクリチュール革命

第 3 章　音が意味と〈なる〉とき，光が意味と〈なる〉とき
1　言語に係わる意味
2　〈書かれたことば〉が意味となるとき
3　〈話されたことば〉が意味となるとき
4　ことばは意味となったり，ならなかったりする
5　〈意味が通じる〉ことから出発する虚構の形而上学
6　発話者と受話者の〈意味〉はなぜ異なるのか
7　〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉の統一という擬制

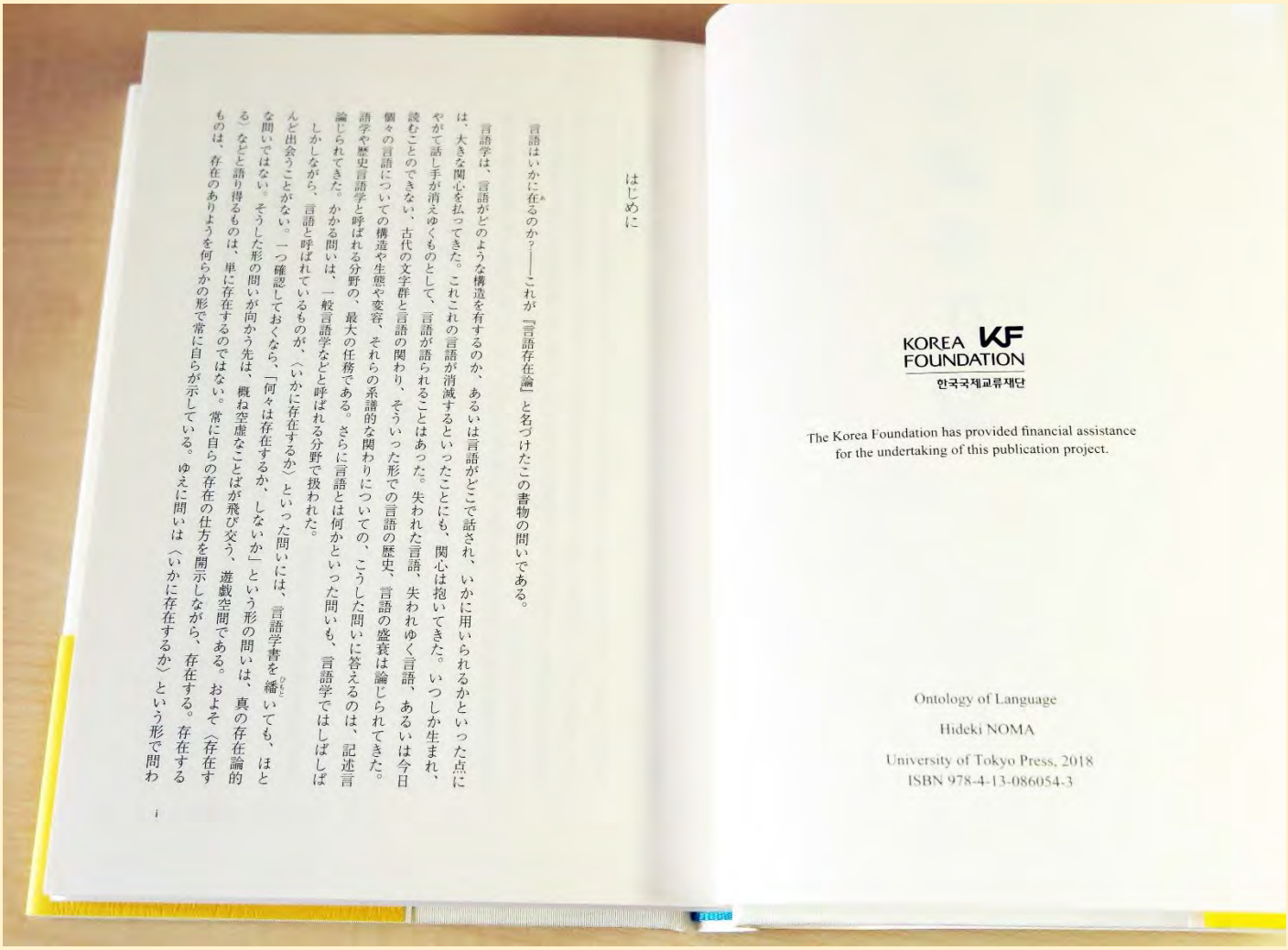
第 4 章　〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉
1　〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の仕掛け
2　オト＝言語として在り，ヒカリ＝文字として在る
3　〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の〈時間〉
4　〈形音義トライアングル〉の仕掛け
5　引用論
6　〈話されたことば〉の複数の話し手と複数の聞き手
7　〈書かれたことば〉におけるテクストの書き換えと重層的産出
8　IT 革命と言語の存在様式，表現様式の変容――新たな言語場
9　言語の存在様式と表現様式の区別が言語教育へ突きつけるもの

第 5 章　発話論・文論――言語場から
1　言語存在論という問いから言語の内を見る
2　談話とテクスト，そして発話
3　文とはいかなる単位か
4　単語（word）の桎梏，文（sentence）の桎梏
5　言語を語る〈文〉の病

第 6 章　主述論・省略論――言語化するということ
1　〈主語―述語文〉中心主義の桎梏
2　言語事実における〈主語文〉と〈非主語文〉，〈述語文〉と〈非述語文〉
3　〈省略〉論――言語化されるということ
4　ことばが話し手の「意図」や「目的」の結果だという目的論的言語観

第 7 章　真偽論・時制論・命名論――言語的対象世界の実践的産出
1　言語外現実――真偽論の陥穽
2　〈非文〉と真偽値，〈非文〉と自然さ
3　「普通の文」と「普通でない文」は連なった広野に在る
4　〈不自然〉を胚胎する言語――意味の二項対立が融解する
5　空想も嘘も矛盾も語る言語――言語が描き出すもの
6　自らに背理する言語――言語は自らのうちに異質なものを蔵す＝言語の自己背理性
7　言語存在論が問う時制論
8　命名論――名づけから言語的対象世界の実践的産出へ

第 8 章　動態としての言語・動態としての意味
1　〈言語静態観〉の桎梏
2　間言語的煩悶――言語の間で動くものたち
3　動態としての意味，〈意味同一性〉という物神化
4　〈教え＝学ぶ〉言語――言語の本源的な共生性



はじめに

言語はいかに在るのか？――これが『言語存在論』と名づけたこの書物の問いである。

言語学は、言語がどのような構造を有するのか、あるいは言語がどこで話され、いかに用いられるかといった点には、大きな関心を払ってきた。これこれの言語が消滅するといったことにも、関心は抱いてきた。いつしか生まれ、やがて話し手が消えゆくものとして、言語が語られることはあった。失われた言語、失われゆく言語、あるいは今日読むことのできない、古代の文字群と言語の関わり、そういった形での言語の歴史、言語の盛衰は論じられてきた。個々の言語についての構造や生態や変容、それらの系譜的な関わりについての、こうした問いに答えるのは、記述言語学や歴史言語学と呼ばれる分野の、最大の任務である。さらに言語とは何かといった問いも、言語学ではしばしば論じられてきた。かかる問いは、一般言語学などと呼ばれる分野で扱われた。

しかしながら、言語と呼ばれているものが、〈いかに存在するか〉といった問いには、言語学書を繙いても、ほとんど出会うことがない。一つ確認しておくなら、「何々は存在するか、しないか」という形の問いは、真の存在論的な問いではない。そうした形の問いが向かう先は、概ね空虚なことばが飛び交う、遊戯空間である。およそ〈存在する〉などと語り得るものは、単に存在するのではない。常に自らの存在の仕方を開示しながら、存在する。存在するものは、存在のありようを何らかの形で常に自らが示している。ゆえに問いは〈いかに存在するか〉という形で問わ

KOREA KF FOUNDATION
한국국제교류재단

The Korea Foundation has provided financial assistance
for the undertaking of this publication project.

Ontology of Language
Hideki NOMA
University of Tokyo Press, 2018
ISBN 978-4-13-086054-3

『言語存在論』

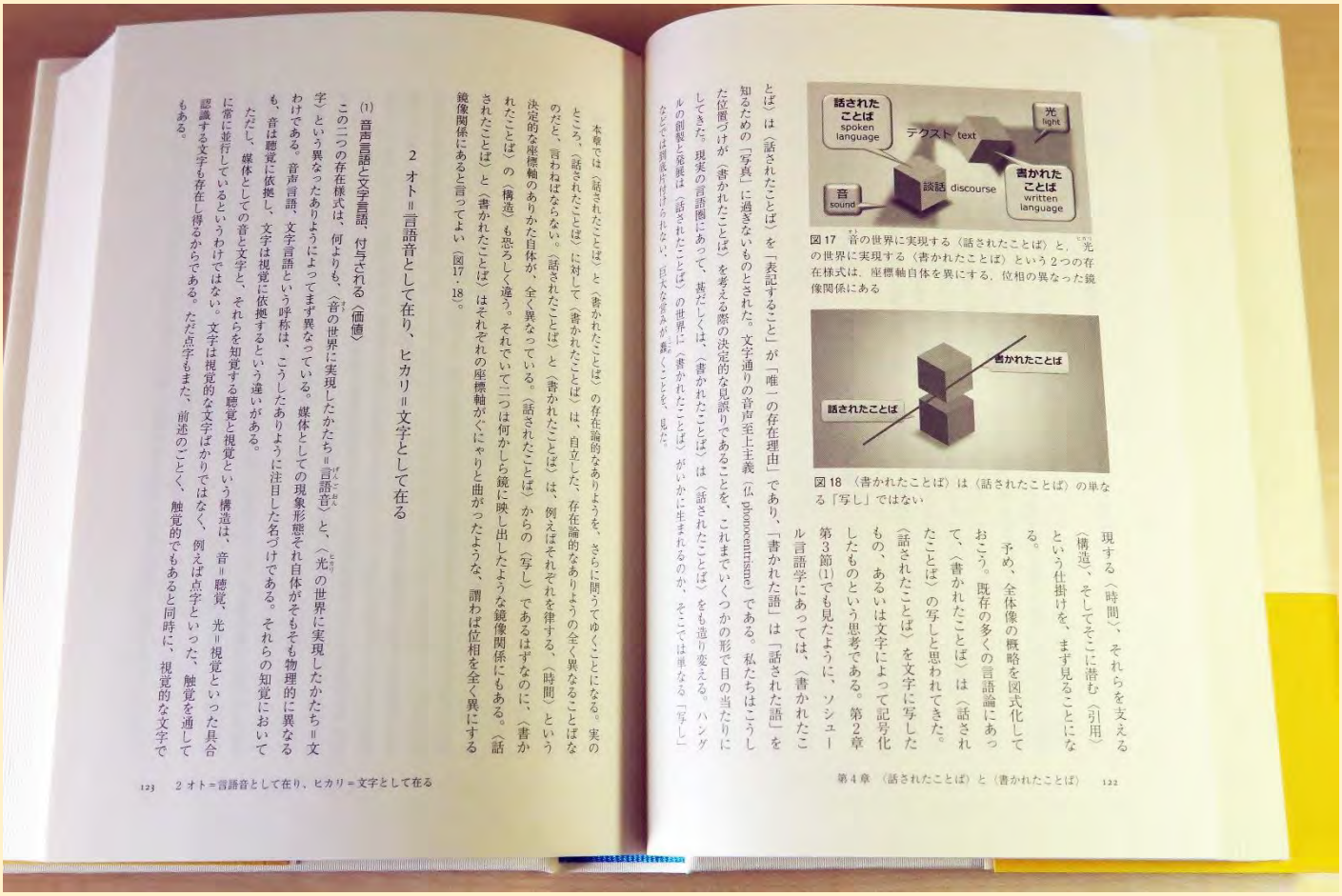


図17　音の世界に実現する〈話されたことば〉と，光の世界に実現する〈書かれたことば〉という2つの存在様式は，座標軸自体を異にする，位相の異なった鏡像関係にある

図18　〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉の単なる「写し」ではない

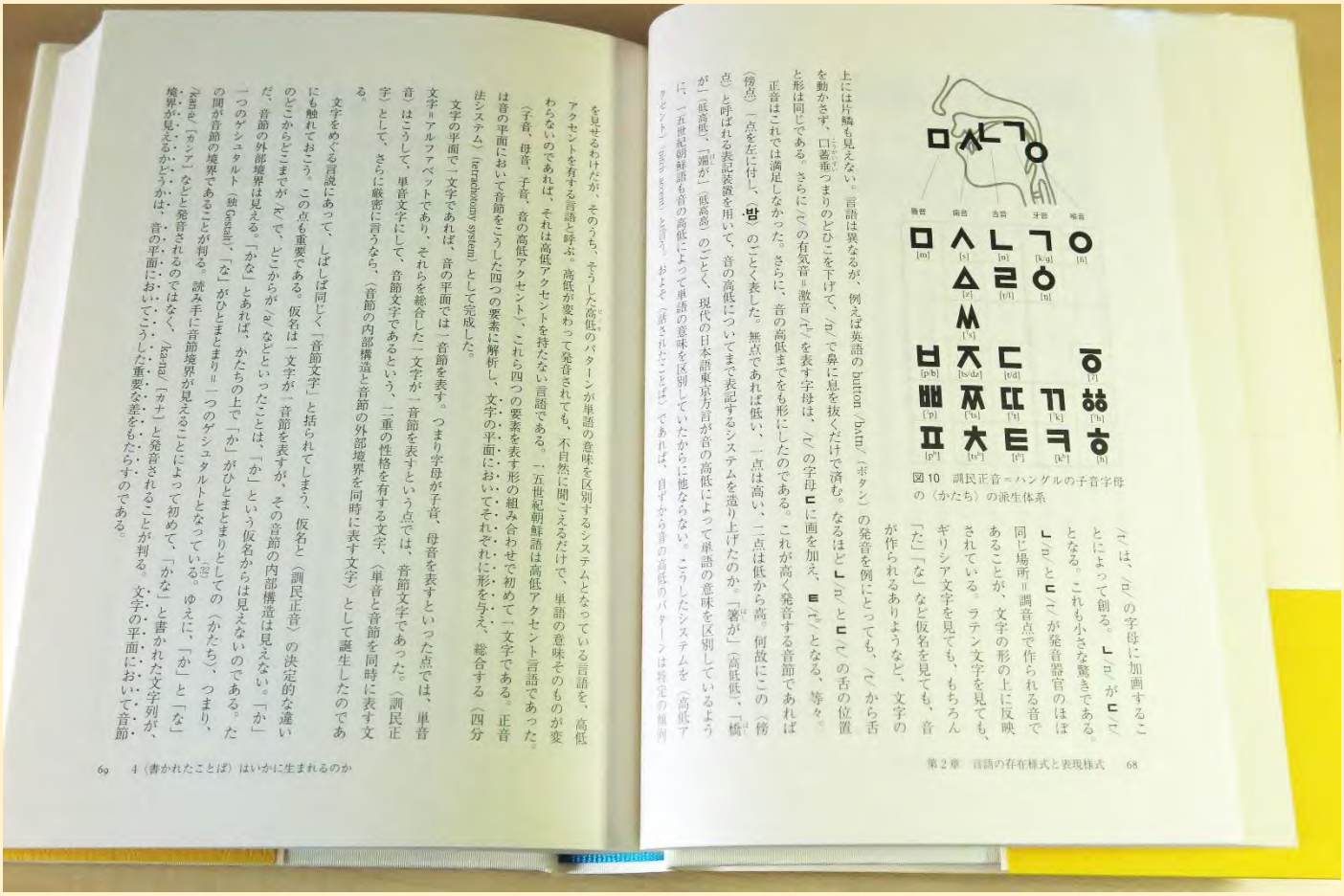
本章では〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の存在論的なありようを、さらに問うてゆくことになる。実のところ、〈話されたことば〉に対して〈書かれたことば〉は、自立した、存在論的なありようの全く異なることばなのだと、言わねばならない。〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉は、例えばそれぞれを律する〈時間〉という決定的な座標軸のありかた自体が、全く異なっている。〈話されたことば〉からの〈写し〉であるはずなのに、〈書かれたことば〉の〈構造〉も恐ろしく違う。それでいて二つは何かしら鏡に映し出したような鏡像関係にもある。〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉はそれぞれの座標軸がぐにゃりと曲がったような、謂わば位相を全く異にする鏡像関係にあると言ってよい（図17・18）。

2　オト＝言語音として在り、ヒカリ＝文字として在る

(1)　音声言語と文字言語，付与される〈価値〉

この二つの存在様式は、何よりも、〈音の世界に実現したかたち＝言語音〉と、〈光の世界に実現したかたち＝文字〉という異なったありようによってまず異なっている。媒体としての現象形態それ自体がそもそも物理的に異なるわけである。音声言語、文字言語という呼称は、こうしたありように注目した名づけである。それらの知覚においても、音は聴覚に依拠し、文字は視覚に依拠するという違いがある。

ただし、媒体としての音と文字と、それらを知覚する聴覚と視覚という構造は、音＝聴覚、光＝視覚といった具合に常に並行しているというわけではない。文字は視覚的な文字ばかりではなく、例えば点字といった、触覚を通して認識する文字も存在し得るからである。ただ点字もまた、前述のごとく、触覚的でもあると同時に、視覚的な文字でもある。



上には片鱗も見えない。言語は異なるが、例えば英語の button〈bʌtn〉（ボタン）の発音をみにとってもに〈t〉から舌を動かさず、口蓋垂つまりのどひこを下げて、〈n〉で鼻に息を抜くだけで済む。なるほど ㄴ〈n〉が ㄷ〈t〉となる。これも小さな驚きである。ㄴ〈n〉と ㄷ〈t〉が発音器官のほぼ同じ場所＝調音点で作られる音であることが、文字の形の上に反映されている。ラテン文字を見ても、ギリシア文字を見ても、もちろん「た」「な」など仮名を見ても、音が作られるありようなど、文字の形は〈t〉は、〈n〉の字母に加画することによって創る。ㄴ〈n〉が ㄷ〈t〉となる。これも小さな驚きである。ㄴ〈n〉と ㄷ〈t〉が発音器官のほぼ同じ場所＝調音点で作られる音であることが、文字の形の上に反映されている。ラテン文字を見ても、ギリシア文字を見ても、もちろん「た」「な」など仮名を見ても、音が作られるありようなど、文字の

図10　調民正音＝ハングルの子音字母の〈かたち〉の派生体系

を見せるわけだが、そのうち、そうした高低のパターンが単語の意味を区別するシステムとなっている言語を、高低アクセントを有する言語と呼ぶ。高低が変わって発音されても、不自然に聞こえるだけで、単語の意味そのものが変わらないのであれば、それは高低アクセントを持たない言語である。一五世紀朝鮮語は高低アクセント言語であった。〈子音、母音、子音、音の高低アクセント〉、これら四つの要素を表す形の組み合わせで初めて一文字である。正音は音の平面において音節をこうした四つの要素に解析し、文字の平面においてそれぞれに形を与え、総合する〈四分法システム〉（tetrachotomy system）として完成した。

文字の平面で一文字であれば、音の平面では一音節を表す。つまり字母が子音、母音を表すといった点では、単音文字＝アルファベットであり、それらを総合した一文字が一音節を表すという点では、音節文字であった。〈訓民正音〉はこうして、単音文字にして、音節文字であるという、二重の性格を有する文字、〈単音と音節を同時に表す文字〉として誕生したのである。

文字をめぐる言説にあって、しばしば同じく「音節文字」と括られてしまう、仮名と〈訓民正音〉の決定的な違いのどこからどこまでが〈a〉で、どこからが〈ka〉などといったことは、「か」という仮名からは見えないのである。ただ、音節の外部境界は見える。「かな」とあれば、かたちの上で「か」がひとまとまりとしての〈かたち〉、つまり、一つのゲシュタルト（独 Gestalt）、「な」がひとまとまり＝一つのゲシュタルトとなっている。[12] ゆえに、「か」と「な」の間が音節の境界であることが判る。読み手に音節境界が見えることによって初めて、「かな」と書かれた文字列が、〈kana〉（カナ）などと発音されるのではなく、〈kana〉（カナ）と発音されることが判る。文字の平面において音節境界が見えるかどうかは、音の平面においてこうした重要な差をもたらすのである。

『言語存在論』

Bally, Charles　11, 229, 250, 345, 註 51, 註 145
Barthes, Roland　註 52, 註 157
Benjamin, Valter　194
Benveniste, Émile　321, 353
Braille, Louis　134
Brentano, Franz　330
Bricmont, Jean　註 45
Bright, Willian　註 47
Carpenter, Julie　註 114
Chao, Yuen Ren　10, 註 51
Chomsky, Noam　16, 304, 註 8, 註 9, 註 11
Coulthard, Malcolm　註 109
Courtenay, Baudouin de　73
Daniels, Peter T.　註 47, 註 59
Derrida, Jacques　101, 129, 169, 298, 註 30, 註 47, 註 67, 註 154, 註 155
Dick, Philip K.　318, 註 132
Dummett, Michael　註 18
Everett, Daniel L.　332, 註 141, 註 142
Fodor, Jerry A.　6, 註 3
Frege, Gottlob　32, 註 18, 註 124
Garfinkel　註 24
Gatlif, Tony　53
George, Stefan　326
Harris, Zellig S.　註 109
Heidegger, Martin　8, 326, 352, 357, 註 4, 註 5, 註 134, 註 152
Hopper, Paul J.　註 145
Humboldt, Wilhelm von　16, 註 10
Illich, Ivan　84, 159, 註 42
Jakobson, Roman　註 148
Jespersen, Otto　15, 註 88
Karcevskij, Sergej　229
Koffka, K.　註 32
Köhler, W.　註 32
Kristeva, Julia　107
Lancelot, Claude　331
Leech, G. N.　317–318
Lehmann, Christian　註 145
Lerch, Eugen　230
Lewandowski, Theodor　註 88, 註 136
Marty, Anton　330
Marx, Karl　註 143
Mathesius, Vilém　249
McLuhan, Marshall　7, 184, 註 42
Merleau-Ponty, Maurice　9
Milton, John　252
Moati, Raoul　註 121
Moseley, Christopher　351
Nevsky, Nikolai　83
Ong, Walter J.　44, 191, 註 42
Orwell, George　318
Peirce, Charles S.　註 108
Plato　註 42, 註 49
Polanyi, Michael　註 29
Quine, W. V.　253, 274, 369, 註 115, 註 149
Ries, J.　230, 註 88
Rollinger, Robin　註 136
Russell, Bertrand　251
Sacks, Harvey　175, 227
Sallabank, Julia　351
Sanders, Barry　159, 註 42
Sapir, Edward　52, 註 135
Saussure, Ferdinand de　11–12, 51–52, 註 27, 註 46, 註 51, 註 65, 註 118
Schmitt, Tchavolo　53
Searle, John R.　269, 340
Sechehaye, Albert　11
Seidel, E.　註 88
Seven　257
Sokal, Alan D.　114, 註 45
Svenbro, Jesper　7
Traugott, Elizabeth Closs　註 145
Trubetzkoy, N. S.　註 33
Vachek, Josef　224, 註 26
Vygotsky, L. S.　6
Wertheimer, M.　註 32
Wittgenstein, Ludwig　32, 335–336, 註 19
Wunderlich, Dieter　註 109
Zalta, Edward N.　註 136
Zamenhof, Lazaro Ludoviko　註 160
Ziemer, Hermman　230
Бахтин, Михаил Михайлович　26
Виноградов, А. А.　230
Волошинов, В. Н.　26
Выготский, Лев Семенович　6
Дзидзигури, Ш. В.　註 39
Карцевский, Сергей И.　229, 註 94
Климов, Г. А.　88
Невский, Николай　83
Трубецкой, Н. С.　註 33
Филин, Ф.　註 103

事項索引

数字アルファベット

[1984]　318
21 世紀世宗計画　286
AI の意味　219
be 動詞　353, 355
C 言語　211
DNA　194–195, 註 74
E メール　211, 215
Facebook　206, 209
Gestalt　註 32
Google　204–205
IC　註 51
IT　216
IT 革命　17, 184, 188
Longman Dictionary of Contemporary English　註 101
Lost Paradice, A　註 114
Microsoft　204
Nootoka 語　註 135
SOV 言語　282
TAVnet　205, 213
TAVnet 資本　205–206, 216, 218–219
turn　174–176, 228, 287, 註 64, 註 70, 註 85
turn は重なり得る　註 85
turn 誘発機能　190, 註 70
turn 切断子　註 70, 註 98
Twitter　206

あ　行

あいづち　190, 222, 註 85
あいづち発話　註 70
相手と重なった発話　287
アイヌ語　29
曖昧化／曖昧性　105–106
曖昧な／曖昧なる意味　115, 163
曖昧に実現する意味　105
アオリスト　325, 註 133
アクセント　13, 66
アクセント表記　233
亜形態素　186
アナーキーな言語場　205
アナグラム　178, 註 64
アナグラム研究時代　註 64
アナログ・テクスト　197, 203–205
アナロジー　9
アブギダ　註 59
アブジャド　註 59
アマゾン　333
網と森　218
アメリカ構造言語学　52, 註 135
誤り　314
予め用意されたテクスト　209
新たな言語場　184, 189
アラビア　88
アラビア数字　162, 256
アラビア文字　124, 140–141, 註 59
形状（ありかた）ノ詞（ことば）　註 139
ありよう（を示す）　i, 355
アルタイ諸語　185
アルファベット　74–75, 90, 145–146, 148, 151–155, 157, 159–162, 註 59
アルファベト　361
『アルプスの少女』　284
アンシェヌマン　72, 註 34
暗示的意味　115
『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』　318
暗黙知　55, 註 28
いいね！　209
言い間違い　313, 註 158
威嚇　270
いかに在るか　ii, 6, 111, 363, 367
いかに存在するか　i
意義　註 124
意義素論　247, 248
生きている言語　50
伊語→イタリア語
意識　vi, 5, 364
いじめ　212
位相的な違い　vi, 註 108
位相的に異なる：〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉が　註 85
位相の異なった鏡像関係　122
イタリア語／伊語　63, 79
イタリック語派　353
一音節語　149
一語文　235–236, 274, 283, 344
一二点　62
一人称　註 122
一人称の人物　291
一文を超えた文法の記述　註 110
一回的　200
一種の機械　362–363
一般　248, 258
一般言語学　i, 355
『一般言語学講義』　11, 119, 350, 註 28
一般人　247–248
一般的な意味　249
一般文法　註 140
一般名詞　註 149
イデオロギー　208
イデオロギー操作　206
意図　252, 270, 298–300
移動　211
異文化　106
異分析　142, 314
いま・ここ　112, 126–127, 130, 132, 209, 315, 319, 321–322
いま・ここに・新たに・実現する意味　374
未だ読まれていない今　127
意味　v–vi, 23, 25, 95, 100, 148, 153–160, 163–164, 210, 212, 244, 248, 296, 311, 336, 337, 359–360, 364, 367, 370, 374–375, 註 124, 註 158
意味（発話者と受話者の）　112–113
意味が実現しない　309
意味が実現する　102–103
意味から自由になる　111
意味作用　9
意味されるもの　36, 117–118
意味するもの　36, 117–119
意味づけ論　註 42
意味的な非文　304, 310
意味と意義　365
意味同一性　359–360
意味同一性の神話界　119
意味と機能　219
意味として実現しない　97–98